

これから実際に本書を手にした機関で様々な活用方法が編み出されてゆくことでしょう。

ドキュメンテーションとして特徴、その将来性

私が感じる、大きな特徴は、「記述、分類・配列などの配慮」と「増補調査への配慮」です。

個々の展覧会記録の「記述、分類・配列などの配慮」は、記載事項、採録基準・方法、典拠資料が的確で、違和感なく利用できるよに作られています。ひとことで「展覧会」といっても60年あまりの期間を対象としています。美術館の増加や、展覧会に関わり方の多様化（主催、共催、後援、協力、企画協力、特別協力、協賛など）、展覧会に関わる機関・団体の増加（新聞社、放送局、企画会社、あるいは日本美術館企画協議会、美術館連絡協議会など）があり、また刊行される展覧会カタログも日本の経済成長に合わせて立派なものになり、近年では出版社による書籍化されたものも多く見られるようになりました。そんな展覧会を廻る状況の変遷をフォローするような方法がとられています。詳しくは凡例に譲ります。分類、配列も理にあっていて、個々の展覧会の集積によって、展覧会を中心にした、その地域の美術館史、美術史が浮かび上がります。冒頭の「時刻表」に倣えば、編纂者が数えきれないほどの「旅」をしているからこそでしょう。

あと、特に今回の記事で触れたいのは、収録全データからすると決して多いことではないのですが「追補調査への配慮」があることです。

1) 記述の良否が確認できなかったものについては「\*」印を付していること。2) 美術館ごとの調査状況が書かれていること。具体例は、美術館の展覧会記録の末尾に「展覧会カタログが国立新美術館、ALCに参加する図書室に所蔵されている展覧会のみ記載した。」(八戸市美術館など)、「ここまでの開催記録は、個々の展覧会調査の上『山形美術館二十年史』を参照し追記した。」(山形美術館、1986年3月まで)などと注記されているのです。これらの調査状況を説明する一文があることによって、次にこのデータベースを更新する者が、追補計画を立てられるわけです。さらに、3) 東京、関東圏以外の各地のデータの充実の方法が示されていること。京都府立京都文化会館と京都市美術館の展覧会記録においては、京都府立総合資料館と京都府立図書館が所蔵する展覧会カタログも典拠資料としてあります。地元の歴史のある図書館を調査対象にに加えたことにより、京都府立京都文化会館で60件あまり、京都市美術館でも5件の展覧会記録が掘り起こされたことがわかります。つまり各地の専門機関（美術館、図書館）と連携すれば、さらにこのデータ集の充実が可能であることを示す

ものです。

過ぎ去った展覧会への旅に

再び同僚のこたばを借りるならば、この「時刻表」を元に、美術司書は旅の提案（レファレンス）をし、図書館利用者に思い出（調査成果）を提供することになるでしょう。美術館学芸員は「時刻表」を携え、まだ見ぬ地へのレール（調査）を敷き、駅（研究成果である展覧会）を建てられることになるでしょう。ぜひアート・ドキュメンテーション学会会員のみなさまにも、一度過ぎ去った展覧会への旅に出られることをお勧めいたします。

\* \* \*

なお、国立新美術館では、今年度末に収録館をはじめ関係機関への送付を計画しており、また近くこの「開催実績」をもとにした展覧会データのウェブ版公開を予定しています。多くの方に利用されることを願っております。

(きっかわ ひでき 国立新美術館)



Table with columns: 番号, 展覧会名, 会期, 主催・協力等, 備考, カタログの巻数(注記), NAC, ALC, 所蔵. It lists various exhibitions and their details across two sections: (公立)東京 and ●東京都美術館(新館) (東京都美術館新館(法庫蔵)).